

# エミール・ゾラの道徳的自然観

## 19世紀ヨーロッパ医学思想との係わりにおいて

林田 愛

### 序

20世紀後半にヨーロッパやアメリカで熱狂的な広がりを見せた動物愛護運動は、21世紀になり新たな局面を迎えている。生命倫理の分野でも、大学や研究所における動物実験の規制、畜産動物の飼育並びに運搬に至るまで、詳細な検討がなされるようになった<sup>1)</sup>。一方ヨーロッパ連合は、内部で生じた反対意見を押さえて2003年、動物実験が行われた化粧品のEU連合間での流通を2009年以降廃止する法案を通した。このようなヨーロッパ諸国の動物愛護精神は19世紀に生まれたものであり、そこで文学者や哲学者たちも重要な役割を担っていたことを忘れてはならない。むろんそれ以前、たとえばフランスでは16世紀のモンテーニュや18世紀のヴォルテールにおいて深い動物への愛を読み取ることができる<sup>2)</sup>。しかし優れた人々の思想というものは往々にして時代と一致しない。その思想が後世に受け継がれ、新たな土壌を発見したときに世の中を揺り動かすほどの大きな力となるのだ。

それでは19世紀に興った動物愛護運動とはいかなるものだったのか。牛馬への虐待防止のためにイギリスで立法化されたマーティン法(1822)に端を発し、その後ドイツを始めヨーロッパ各地に次々と動物愛護協会が設立されるが、フランスでは1850年に可決されたグラモン法が現在の動物愛護運動の礎となっている。1870年代になるとフランス動物愛護協会はその活動を動物の生体解剖反対運動へと広げていくが、ヴィクトル・ユゴーが生体解剖を断罪したことは興味深い<sup>3)</sup>。

19世紀後半に大きな発展を遂げ、キリスト教に代わる新しい宗教にみえた近代科学がその翳りを見せはじめたとき、人びとは混乱に陥る。それは当時退廃主義やペシミズムが広く社会を蝕んだことと無関係では

ない。現代に生きるわれわれにとって、科学の進歩が当時いかなる興奮のもとに受け止められたのか想像することは難しい。熱狂のあまり、多くの人びとは科学という宗教の祭壇で多くの動物が血を流し悲鳴をあげることに何の懐疑も抱かなかった。「医学の進歩」のため、ひいては人類全体の幸福追求のためであるという信念は、人間が持ちうる一握りの良心さえ麻痺させるのに十分な効力があつたのだ。以下はショーペンハウアーの「宗教について」からの引用である。

私がゲッティンゲン大学で勉強していたとき、ブルーメンバッハは生理学の講義で、生体解剖のおそろしい面について切々とわれわれに語った。それがいかにも残忍でおそろしいことであること、したがってめったに用いるべきではないこと、ごく重要で、直接役に立つ研究のためにだけこの措置に踏み切るべきであること、それを行う場合には、科学の祭壇にささげられた残忍な犠牲が最大の利益をもたらすよう、大講堂で最大限に公開し、あらゆる医学者を招待したうえで行わなければならない、と説明してくれたのである。—ところが今日では、どんな藪医者でも色々な問題を解決するために、その拷問室で残忍きわまる動物虐待をやる権能があると思っている。じつはその問題の解決はとくに書物に載っているのであって、ただ彼らがあまり怠惰・無知であるために、その書物をのぞかないだけのことなのだ<sup>4)</sup>。

ショーペンハウアーは犬を生涯の友とし動物について多く語った哲学者であるが、『意志と表象としての世界』第4巻66節にもみられる動物実験批判が、「宗教について」ではユダヤ・キリスト教的自然観をとおして展開される。フランスの自然主義作家エミール・ゾラ（1840-1902）は、当時流行していた厭世哲学に影響を受け『生きる喜び』（1883）を書いた。アンリ・ミトラン Henri Mitterand によれば、執筆の際、ゾラが参考資料としたドイツ哲学に関する研究書以外で個人的に読んだショーペンハウアーの著作数は断定できない<sup>5)</sup>。ともかくゾラは、フランスの知的階級に蔓延していた「未消化な」<sup>6)</sup>厭世思想を超克する意味で『生きる喜び』を描き、そこで自己の人生哲学を様々な角度から提示した。その草稿がフランス国立図書館の手稿部に保存されているが、

L'Ebauche(覚書)という準備ノート<sup>7)</sup>のなかに「恐怖。ショーペンハウアー。人生について」(La peur. Schopenhauer. Sur la vie: folios 259-284)という項目がある。260ページに「ペシミズムは18世紀の陽気な狂気のあとにくる、この時代の狂気である[・・・]」<sup>8)</sup>とあり、その後もドイツ思想研究書やショーペンハウアー翻訳書からの抜粋とみられるメモが続くが、272ページでは「生体解剖反対」(Contre les vivisections)<sup>9)</sup>という語を発見できる。同ページには、ショーペンハウアー『この世の苦しみ』の一節を想起させる「意志は父親から、知性は母親から」<sup>10)</sup>、そして「行動への嫌悪、仏陀」<sup>11)</sup>という記述がある。どれも短い書き抜きでありゾラ自身のコメントもないが、「生体解剖反対」という語の重要性は強調されて然るべきである。フランス国立図書館に現存するテオデュル・リボ Théodule Ribot (1839 - 1923) 著 *La Philosophie de Schopenhauer* (1874) はゾラが依拠した資料のひとつであるが、その中に上で紹介したショーペンハウアーの動物実験批判がそっくり引用されている<sup>12)</sup>。なお、フランス語の vivisection は19世紀当時、主に動物を対象とした「生体解剖」を指すが、現在では広く「動物実験」という枠組みで捉えられている。

たとえショーペンハウアー論に引用されていた一節でしかなかったとしても、ゾラは「翻訳」という媒介を通してドイツ人哲学者の思想に触れ、それに共鳴した。思想の国境を越えた伝播は翻訳という作業なしではありえない。19世紀、動物愛護運動がヨーロッパ諸国に広まったことと無関係ではないだろう。そこで本稿では、自身も動物愛護協会に表彰され<sup>13)</sup>、その作品で動物へ愛情の眼差しを注ぎ続けたゾラを中心に19世紀ヨーロッパにおける道徳と科学の問題を見つめながら、国境と時代を越えた普遍的宗教としての「生命への愛」とはなにかを考究したい。

## 1) ベルナルとゾラ：『実験医学序説』と『実験小説論』

ゾラがクロード・ベルナル (1813-1878) の『実験医学序説』(以下『序説』と略す)を下敷きにして『実験小説論』(1879)を上梓したことはあまりにも有名だ。ゾラが友人の Henry Céard (1851-1892) に借りて『序説』を読んだのは1879年初頭とされ、その影響を色濃く反映した『実験小説論』では実験医学理論に支えられた小説創造の未来を高ら

かに謳う。全能なる人間は自然を隷従させ、その法則を利用して自由を得る、それを可能にするのが実験医学であり、小説家はその登場人物に実験と観察を加えねばならない、そこに新しい文学があるとゾラは躊躇なしに言う。ベルナール医学の理解においても、または文学理論においてもほとんど価値がないと考えられてきた当作品には、実は最も重要な意味があった。それは、『序説』が読者に及ぼす熱病的影響力が『実験小説論』に表出しているということである。

以下に記す箇所は、『序説』の第2章第3節目「生体解剖について」からの引用であり、ゾラはこの箇所をそのまま『実験小説論』で引用している<sup>14)</sup>。

生理学者は世俗の者ではない。学者であり、己が追求する科学的観念にとりつかれ没頭したものである。動物達の叫びはその耳にはとどかず、どくどくと流れ出る血はもう見えない。見えるのはすでに己の観念だけであり、発見したいと欲する諸問題を隠し持つ諸器官しか知覚しない。同様に、外科医は心を揺さぶるような人の叫び声にも嗚咽にもひるまない。なぜなら彼は己の観念と外科手術の目的しかみないからである。さらにまた、解剖学者は自分が身震いするような死体置き場にいることを感じない。科学的観念の影響のもと、彼以外の人間であったら恐怖と嫌悪の対象となるような腐臭のする青白い肉のなかの神経網を悦楽にひたりながら探りあてるのだ。<sup>15)</sup>

「実験医学の父」と称されるクロード・ベルナールの人間性、そして医学に対する姿勢が明確に表れている箇所である。作家兼ジャーナリストであり、医学的素養をもつハンス・リュージュが数年にわたる克明な調査を行ない、多くの医師たちの証言で裏づけした『罪なき者の虐殺』は、1976年のイタリア語版出版以来アメリカやイギリスをはじめ世界各国で翻訳され医学界にも大きな一石を投じた画期的な書物である。その中で著者は実験医学の功罪、そしてベルナールが科学という名のもとに行った残虐行為の数々を、その著作に露呈しているものだけではなく、彼に携わった人びとの証言を含め、フランス本国をはじめベルナール賛美の多い伝記のなかから事実だけをとりだしてその全貌を明らかにしている。リュージュは動物実験がそれを行う人間に及ぼす精神的弊害

に注目して、実験室の中と外で別人格が形成され精神分裂が生じるプロセスを説明する。上のベルナルの引用部分に関して、イギリスの作家ジョン・ヴィヴィアンは現代精神医学に照準を合わせながら、「この文に表れているのは動物実験者が完全には逃れ得ない、最重症の精神病である偏執性分裂病の、教科書に載るような適例の症状」であると認めている<sup>16)</sup>。

『序説』においてベルナルは、観察と技術に基づくヒポクラテス医学ではなく、実験医学こそが病気の支配者となり、この世に多くの正義と自由をもたらさなければならないと高揚した筆致で語る。特に引用された章では、動物実験がどれほど必要不可欠のものが、そして人体実験がいかに不道徳であるか、とベルナルは繰り返し読者に問うが、この畳み掛けるような文体は読む側に相当な心理操作を行う。最良の種である人間はそれ以外の種をどのように扱おうと罪にならない、それどころか動物実験に反対する者は科学を理解しない劣者だという印象を与えている。冷静な判断力があれば、動物と人間とにかかわらず不当な苦しみを与えることは同じように不道徳であり、ベルナルの理論が孕む人間性の欠如を読み取ることができるだろう。だが、科学に絶対の信頼をおきベルナルを崇拝する人間がこの書を読めば、「実験医学」という宗教に入信することは疑うべくもない。ベルナルの科学礼賛にゾラは『実験小説論』執筆当時完全に洗脳されていた。ただしそれは科学の限界に直面する1880年10月の母親の死までにわたるほんの短い間であった。もともと、当時最新の遺伝理論<sup>17)</sup>を軸に構成された20篇からなる小説群『ルーゴン・マッカール叢書』(1869-1893)の小説理念と科学は切り離せない。実験小説として描かれた『ナナ』(1880)では、一娼婦の退廃と悪徳がいかにして社会という有機体を蝕み腐らせていくかという過程を、冷徹な科学者としてメスをふるい描き出した。同時期に影響を受けたショーペンハウアーにちなんで着想された『生きる喜び』は母親の死によって断念され、1883年に改めて執筆されることになる。母親の死に始まり、フローベールやツルゲーネフなど親しい知人の不幸によってその死生観を変える1880年からの3年間はなければ、ゾラはカズノーフ医師(『生きる喜び』)やパスカル(『パスカル博士』1893)のような「生命の神秘」を尊び、人間と動物に普遍的な愛情をそそぐ医師を描くことはできなかったであろう。

『序説』がコレージュ・ド・フランスの若き医学生達に与えた影響はいかばかりだったのか。ベルナル自身も、医学生時代にマジャンディによる動物実験にふれ実験医学の途を歩む決意をしたという。ベルナルと同じコレージュ・ド・フランスの教壇に立ったジュール・ミシュレ Jules Michelet (1798-1874) が「動物は人間よりも善きものであり、救いは最も小さきものたちからくるのだ。」<sup>18)</sup>と明日を担う若人に力強く語っていたとは、皮肉な事実である。

## 2) 動物をめぐる思想史

紀元2世紀のガレーノスに始まり、近代科学の19世紀にマジャンディやベルナルによって提唱された「動物実験」の意味は一体何か。なぜ人は人命救済のための動物の苦痛や死を正当化しうるのか？これらの問題意識を端緒に、まず西欧における伝統的な自然観のなかに動物を位置づけることを試みる。この問題に関してはすでに詳しい文献が実在するので<sup>19)</sup>、ここではフランス文学に関連する画期的な事象に限って論じることにする。

動物と人間の関係を考えるとき、まずだれもが旧約聖書の「創世記」第1章第28節の「生めよ、ふえよ、地に満ちて、地を支配せよ。海の魚と、空の鳥と、家畜と、地を這う生き物をつかさどれ」という託宣を想起するだろう。これが人間を自然界から引き離し、唯一存在である神の形代であるという意識を西洋社会に深く植えつけることになる。

上の引用箇所はその解釈をめぐる意見が分かるところであるが<sup>20)</sup>、キリスト教会が動物を「魂の救済」から排除してきた長い歴史を考慮すれば、やはり教義としてのキリスト教が人間中心的歴史観を招いたことは否定できない。しかし一方で、イエス・キリストの愛は動物を包んでいたことに注目したい。19世紀フランスを代表する思想家エルネスト・ルナン Ernest Renan (1823-1892) が『イエスの生涯』(1863)で描いてみせたように、イエスは生贄のかわりに、ワインをわが血に、そしてパンをわが肉とみたく自らを差し出した。子羊を屠る儀式は、イエスによって廃止されたのだ<sup>21)</sup>。彼は生贄を捧げることよりも侮りを忘れよと説き、信者のうわべだけの勤行や、司祭達がおこなう形だけの宗教、「心の宗教」でないものをことごとく軽蔑した<sup>22)</sup>。キリスト教会側からは冒瀆的であるとして非難された本書には、司祭達の権力主義やパリサ

イ人の傲慢なふるまいを厭い、常に弱者の味方であったイエスという人間の軌跡がルナンの雄渾な筆致で辿られている。しかしキリスト教の歴史は、教義の名のもと、異端審問、戦争、魔女狩りによって流された夥しい血と切り離せないものであり、教皇第一主義に代表される権力としての教会は、今日もなお西洋諸国の社会のあり方に大きな影響力を与えている。

ゾラは『ローマ』（1896）で教皇主義の脅威のもと、教義にふりまわされ心の救済を忘れた社会に警告を発した。この作家の心にある「良い神父」とは、『生きる喜び』のオルトゥール神父や『ブラッサンの克服』（1874）のブレット神父に代表されるような、清貧に甘んじ、キリスト教を単純な道徳のレベルに引き下げ、他人の信仰を尊重するタイプである。オルトゥール神父は病に苦しむ犬をみて、「人間と同じなのだ」と言う<sup>23)</sup>。神父によるこの一言がいかに多くの意味を併せ持つか、それは自然と人間との間に明らかな断絶を見つけたキリスト教の歴史を振り返ればわかるだろう。19世紀フランスの歴史家ジュール・ミシュレはゾラに大きな影響を与えた人物であるが、彼もまたドグマとしてのキリスト教に懐疑を抱き、『鳥』（1856）、『虫』（1857）、『海』（1861）、『山』（1868）、などの博物誌四部作や『人類の聖書』（1864）、そして『民衆』（1846）において動物を含む自然の復権を訴えた。以下は『民衆』からの引用である。

公会議は動物に対し教会を閉じた。哲学者達は驕りや冷淡さゆえに神学者達を継承し、動物には魂がないと決定したのだ。動物がこの世で苦しんでいても、それがどうしたというのだ？ 動物は優位な生のなかに何の償いも期待してはならないのだ…それ故、いかなる神も動物のためには存在しない。人間の優しい父は人間でないものには残忍な君主となるだろう！…おもちゃを、ただし感情のあるおもちゃをつくること、機械を、ただし苦しむ機械をつくること。悪に耐える能力においてのみ、優位の被造物に似ている自動機械を作ること…！ 無垢で痛ましい多くの生命にこのような審判を下した人間よ、このような不敬虔な考えを持つことのできた冷酷な人間よ、お前達にとって大地はなんと重々しいものであろうか！<sup>24)</sup>

ミシュレはここでキリスト教の教義だけではなく、デカルトをはじめ動物に魂を否定した哲学者たちを弾劾している。ギリシャ・ローマ時代に遡ると、アリストテレスやストア派の哲学者たちは、動物に理性 (*logos*) と信仰 (*doxa*) を否定するが故に道徳的配慮の対象とみなさず、動物は人間のために創造されたものだとした<sup>25)</sup>。ストア派は合理性という境界線を引いて、その有無に従って道徳的配慮を施すか否かを決断する。これら哲学者の動物における合理性の否定は、ユダヤ教ならびにキリスト教の教義と通底し、この思考様式はそのまま西欧キリスト教社会に深く根を下ろしていくことになる。

他方、プラトンは『国家』のなかで動物は人間の化身であるとして合理的配慮の対象とする。動物の理性は単に使用されていないだけであり、犬の認知能力は彼らが習得にみせる喜びに認められ、それは哲学にも通じる<sup>26)</sup>。モンテーニュは異形のことを貶める人間の驕慢を諷り、動物に学べとわれわれに諭すだけでなく動物の情緒は時に人間より発達していると指摘するが、その例として主人に対する親愛の情をあげている<sup>27)</sup>。このような動物と人間の関係を打ち砕いたのが17世紀を代表する哲学者デカルトであり、先のミシュレの引用にもみられるとおり、動物を魂のない機械仕掛けにみたと、感情や痛苦能力を否定する思考形式が一部の哲学者や科学者によって受け継がれることとなった。一方、新カント派の哲学者シャルル・ルヌーヴィエ Charles Renouvier (1815-1903) は *Science de la morale* (1869) において、道徳は宗教や形而上的教義から独立しており、人間は情動も感受性もある動物に対して善意の義務があると断定するが、動物実験に関しては専門家の指示を仰げと消極的になる<sup>28)</sup>。

19世紀は歴史上、病に対して人びとの関心が最も強まった時代だとフィリップ・ミュレ Philippe Muray は言うが<sup>29)</sup>、それが急激な科学技術発展に伴う過度の「科学信仰」を招いたことは否定できない。病を治し人の命を救うことのできる医者は近代科学の新しい司祭となった。リユーシュを援用すれば、魔女の嫌疑をかけられた者から、拷問によって自白させようとする宗教審問官と、動物から無理に情報をひきだそうとする科学者たちとのあいだには類似点がある<sup>30)</sup>。「医学の発展」という言葉が動物実験を含む生命の犠牲に対して人々の心を麻痺させるように、科学という名の宗教は未だその威信を放っている。しかし宗教には



必然的に道徳性が求められるように、それを欠いたものは崩壊の危険性を孕む。ゾラはこの傾向を憂い、健康な理性に支えられた良き科学の未来を追求した作家であった。そこで次は19世紀科学信仰をめぐる諸問題を背景に、動物実験の非道徳性について考察する。

### 3) 動物実験をめぐる問題

19世紀ラルース辞典の「生体解剖」の項には興味深い逸話が紹介されている。1841年、生理学者でクロード・ベルナルの師であるマジジャンディ François Magendi (1783-1855) の講義室につばの広い帽子をかぶって襟の高い黒服を着た年配の男が入ってきた。彼はクエーカー教徒であったが、マジジャンディにむかって、何の権利があつて生きた動物を苦しめ殺すのだ、と問う。マジジャンディは、動物実験がどれほど人類と科学の進歩にとって有益であるかということを強調し、憎むべきは人類のための目的もない戦争や狩猟ではないのか、と反論する。そこでクエーカー教徒は初めて頷きながらこう言う。「たしかにそのとおりだ！動物の生体解剖と同じくらい唾棄すべきものは、戦争と狩猟である」<sup>31)</sup>と。

クエーカー教徒と科学者の主張は平行線をたどるが、動物を生きたまま解剖し、不当な苦しみを与える権利は人間にはないのだ、という前者の意思は強い。ここではマジジャンディはあたかも科学を純粋に追究する人類救済者として描かれているが<sup>32)</sup>、実際には、動物を無意味に切り刻んだり、解剖中の動物をまえに医学生達と笑い興じることもある精神異常者であったといわれる<sup>33)</sup>。その弟子であるベルナルの症状についてはすでに述べたが、彼の実験動物に対する行為は、それを目撃した同僚達から激しい非難を受けている<sup>34)</sup>。ベルナルの動物実験は絶えず間違つた結果がでたために実験の数を増やさねばならず混乱を招いたとされるが、それでも執拗に動物実験にこだわり、弟子達にも薦めていった。*Claude Bernard and Animal Chemistry* (1974) は、肝臓のグリコーゲン機能を発見した「賢者」としてのベルナルを賛美した一冊である。皮肉にも、医学的見地から書かれた本書はベルナルの実験が無惨な失敗を続けていたことを明確に伝えている。一例を挙げれば、1848年4月25日、ベルナルは中型犬の腹部を麻酔なしで切開し、膀胱を塞ぐことによって乳糜の形成を停止しようとした。犬は苦しさのあまり激しくもがいたので腸がこぼれおち、ベルナルはそれを元に戻す際にはっ

きりと損傷を認めた。術後すぐに彼は胃にラードを注入するが、5時間後、その犬は想像を絶する苦しみの果てに息絶えた。このような犠牲を払った結果は、十二指腸の下部近くにいくつかの「極端に細い」乳糜管を発見しただけであった。その後もベルナールは執拗に内臓を調べたが満足ゆく結果が見つからず、腸の損傷が実験の失敗を招いたのだと推論した。そこで彼が出した答えとは、「実験を繰り返さなければならない」という短絡的なものであった。この実験で犠牲になった犬の総数は記録にないが、こうして4日後に書き上げたレポートは「脾液の諸機能について」というごく単純で短いものだったという<sup>35)</sup>。

ショーペンハウアーは動物実験に関して「生体解剖ではフランスの生物学者が先例を示したように思われる。そしてドイツ人はフランス人と張り合って、しばしば大量に、罪のない動物に残虐きわまる拷問を加えるのであるが、その目的とするところは純理論的な、往々愚にもつかない問題を決定するために過ぎない」と言い、具体例を挙げながら、動物実験の根底にある好奇心の充足という側面を暴く<sup>36)</sup>。ゾラの友人であったギュスターヴ・フローベール Gustave Flaubert (1821-1880) の死後出版された『ブヴァールとペキュシェ』(1881) では、愚鈍な2人の男が科学にとりつかれるが、犬の脊髄に燐を注射し地下に閉じ込めて鼻から火をだすかどうか知るために、その犬を血まみれにして追い掛け回すシーンが滑稽に描かれている。その後も鳩を実験で何羽も犠牲にするがすべて失敗に終る。フローベールが動物実験を意図的に非難しているとは断定できないが、「生命」を「もの」としかみない科学の一側面を揶揄したように思われる。

ゾラは狩猟を封建社会に永続する「遺伝的興奮」<sup>37)</sup> とし、生きとし生けるものの自由を侵す悪習とみなして峻拒するが、動物実験には一度もふれていない。一方、医者に関してはカズノーヴ医師やパスカル博士に代表される「良心の医師」を描く。この2人の医者は、医学理論、そしてその人間性とともにクロード・ベルナールと対極にあるが、それはおそらく意図的なものではなく、ゾラが終生心の中に持ちつづけた理想的な医師の姿であったろう。この問題に立ち入って考察することは別の機会にゆずるが、これまでみてきた動物をめぐる19世紀思潮にゾラ独自の科学観を対峙させながら、科学の一貫としての医学のあり方に作家が求めたものを浮き彫りにすることによって、とりあえず本稿の結びとしたい。

### 実験主義の限界：結論に代えて

ゾラはペシミズムを「歩み始めた科学の病」と称した<sup>38)</sup>。同様に、当時ゾラとも面識があり、ソルボンヌの神学者であったエルム・カロは過度のペシミズムまたはオプティミズムを病理的現象とみなす<sup>39)</sup>。『生きる喜び』執筆の際にゾラ自身がカロに準拠しているが、科学の進歩が謳われた時代、ペシミズムや退廃主義が蔓延した現象に科学信仰の限界と19世紀ヨーロッパの病弊をみることができる。

『生きる喜び』において、病的な厭世主義に陥った青年ラザールは世紀末フランスの病を具現している。科学の絶対を信じたがために、身内の病や死によって完全に打ちのめされた挙句、カズノーヴ医師を「それでは科学は無能なのか」と責める。カズノーヴは、病人の前で自分の無力さを味わったのは一度や二度ではないこと、そして科学によって全てを知ろうとするその傲慢さが科学時代に生まれた若者達に共通していること、それが時代の病であると語る。そこに『序説』の科学礼賛に心酔したゾラはもう認められない。科学は決して万能でないこと、そして魂を救う宗教とはなりえないことを、ゾラは愛する人々の死で理解するに至った。ラザールがゾラの分身であるとすれば、カズノーヴもまた作家の思想的成長を内包する人物であり、『ルーゴン・マッカール叢書』最終章のパスカル博士の原型ともいえる。

2人の科学観に共通することは、科学の及ぶことのない広大な未知の世界にむけて「永遠の探求」をし、「ゆっくりと克服していく」ことに健康な科学に支えられた人類の幸福があるとるところである<sup>40)</sup>。『パスカル博士』脱稿前にゾラが現地に赴いて克明な調査を行った『ルルド』（三部作：*Lourdes, Rome, Paris*：1894-1898）では、ピエール・フロマンという神父が既存の教会のあり方に懐疑を抱き、失われた信仰を取り戻そうと、「科学に裏切られ超自然的なものに救いをもとめる人間が集う」ルルドの地に赴く。しかし彼がみたものは傲慢になりすぎた科学信仰のなれのはてであった。かつては医師としての意欲にあふれていたシャシーニュもまた、愛する家族を病で亡くしたことによって、医師でありながら無力な自分を嘆き、半ば捨てる人のような生活を送っていた。彼は「過ちはいつも人間にある」<sup>41)</sup>とする。「病気の数だけ治療法がありそこに常に経験がある。それ故、医学は技術であるべきであり、それは実験的厳密さを持つべきでないからだ。つねに治癒は幸運な状況のなか

に、そして医師の発見の知にある。それだからこそ、このルルドに来て科学の絶対法則について話す者達をみると笑いをこらえきれない。その医学の法則とやらはどこにあるのだ？それを見せてくれ！」<sup>42)</sup>とシャシーニユは訴える。この医師の姿にはすでに、『実験小説論』で「われわれの時代には実験が天才の証拠となるのだ」<sup>43)</sup>と雄弁に語ったゾラを認めることはできない。人間と治療技術への愛、自然治癒力に貢献する全てのものへの愛を示す「医の愛」(メディカル・フィリア)をギリシャ医学は目指した。この精神に基づく善を達成するための手段である「技術としての医学」を、ベルナールは実験医学の発展を阻む迷妄と嘲笑し<sup>44)</sup>、ヒポクラテス医学と実験医学の違いは自然現象を観察することしかできない前者と比べて後者は「好きなように調整して支配することができる」<sup>45)</sup>と語る。パスカルは自分を打ちのめそうとする遺伝の脅威に苦しみ、家系図を辿ってその諸法則をつかもうとするが、ついに遺伝という生命の神秘からは逃れ得ないことを察するに至る。そのときのパスカルの自問自答、「自然を矯正すること、その目的において自然を変えること、それはほめられるべき仕事なのか」<sup>46)</sup>という問いに、ベルナルの医学観と対極にある医師の姿をはっきりと認めることができる。『パスカル博士』の準備ノートでゾラは、「La Science : Credo –sur l'hérédité – sur la vie」<sup>47)</sup>(科学・信条・遺伝について・生命について)というタイトルのもと、作品に込めた思いを書きとめている。人類の未来は科学による理性の進歩にあり、長い試みを経て到達した科学的真理以外はすべて幻想や虚栄であるとゾラは明言し、このようにして得られた真理は幸福をもたらさずとも人を静謐にする、と結論する<sup>48)</sup>。「科学の静謐さ」<sup>49)</sup>という語が強調されるが、それは「謙虚な科学」<sup>50)</sup>と同義語であろう。この謙虚さという概念は、1848年に書かれ、1890年になって出版されることになるルナンの『科学の未来』にも認められる<sup>51)</sup>。同じ準備ノートのなかでゾラは『ルーゴン・マッカール叢書』の哲学的考察として、科学が及ばない未知の領域を示すために「遺伝」というテーマを選んだのだ、と言う<sup>52)</sup>。ここに、作家エミール・ゾラが模索しつづけてようやくたどり着いた真摯な科学観が凝縮している。

『生きる喜び』に見られる「生体解剖反対」という書き込み、ここに翻訳という触媒を通して出会った二つの思想の融合がみられる。そしてその思想は、ドイツとフランス、哲学者と作家という、異なる次元で生

きる2人の人間を結びつけたといえるだろう。ゾラとショーペンハウアーが考究し続けたテーマである「生命への愛」は、人間だけではなく、動物、そして広く自然へと向けたものであった。パスカル博士の次の言葉は、医学に携わる人たちに、そして人間中心の見方を脱却した科学の未来へ向けて発せられたゾラの真摯なメッセージである。

動物は苦しみ、そして愛す。人間の雛型だ。そしてわれわれと同じ生を生きるのだ。私は動物達をノアの箱舟にのせ、家庭のなかにその場所をつくってあげたいと願う。(中略) ああ、動物たちよ、人間の下で這いつくばり悲しむ全ての動物達にたいして、わたしたちはこの生の歴史のなかでどれほど大きな思いやりを与えねばならぬだろう<sup>53)</sup>。

#### 注

- 1) 生命倫理を標榜する学者の間でも動物の権利をめぐるラディカルな意見の相違がある。それにも拘わらず、動物の権利保護派も「動物実験」に関しては肯定的である。UNESCOの社会科学・哲学部門が1989年10月6日に催したシンポジウム(*Bio-Ethique et culture*, Préface du Professeur Jean BERNARD, Textes réunis par Claude DEBRU, Paris, Vrin, 1991.)でGeorges Chapouthierは、種々の動物がそれぞれの生命体を構成する自然均衡の枠において権利を有するのであり、われわれは生命の畏敬を人間だけに限ることはできないと主張するが、動物実験に関しては、空腹の人間が動物を屠ることと同じでその権利を剥奪できるとする(同上、p. 129)。一方、動物の権利擁護派への挑戦的な講演を行ったJean-Marc Noresは、医学倫理の分野で「無用な議論」のひとつとして動物実験の是非を挙げ、「医学の発展のために行う動物実験は意味がない、という欺瞞に満ちた詭弁を容認することはできない」としている(同上、p.132)。
- 2) 動物に関するモンテーニュの考察は『エッセー』の「レーモン・スポンの擁護」で論じられたものが知られる(«Apologie de Raimond Sebond», *Les Essais*, Edition de Pierre Villey, Livre II, Paris, PUF, p. 438-604)。ヴォルテールは『哲学辞書』の「動物たち」という項目のなかで、動物を感情も記憶力もある慈しむべき存在として、アリストテレス主義やデカルトの動物機械論を非難している(«Bêtes», *Œuvres complètes de Voltaire*, *Dictionnaire philosophique*, tome II, XXXI, Paris, Armand-Aubrée, [s. d.], p. 218-220)。
- 3) フランス動物愛護協会とそのイデオロギーに関しては、小倉孝誠『19世

- 紀フランス愛・恐怖・群衆』、第一章「動物達の19世紀」(人文書院、1997年、p. 12-43)を参照。
- 4) ショーペンハウアー『哲学小品集』第15章「宗教について」(ショーペンハウアー全集13、秋山英夫訳、白水社、1996年、197ページ。)原典は、以下の通り。Arthur Schopenhauer, *Pareruga und Paralipomena: kleine philosophische Schriften*, 1851.
- 5) Tome III, p. 1753.
- 6) ショーペンハウアー哲学の真の理解者ではなく、病的ともいえる厭世主義に陥った同時代人を登場人物ラザールに反映させてゾラが用いた表現。ゾラは自身のショーペンハウアー観について次のように述べている。「わたしはラザールを形而上学者にしたかったのではなく、ましてやショーペンハウアーの真性なる信奉者にしたかったのではないのです。なぜなら、フランスにはそのような者は一人としていないからです。」(*La Joie de Vivre*, t. III, p. 1770)以下、ゾラの長編シリーズ『ルーゴン・マッカール叢書』(全20巻)はアンリ・ミトランの編集によるブレイヤード版を参照。*Les Rougon-Macquart: Histoire naturelle et sociale d'une famille sous le second Empire*, Notices, notes et variantes par Henri Mitterrand, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 5 vol., 1960-1970. なお、同作家の後期小説群や文芸理論などについては逐次その出典を明記する。
- 7) ゾラが小説構想を練る準備ノートは、通常 L'Ebauche と Le Plan で構成される。
- 8) Nouvelles Acquisitions françaises (以下 N.a.f.と略す) 10311, f°260.
- 9) *Ibid.*, f° 272.
- 10) *Ibid.*, 『この世の苦しみ』に関しては、1990年にフランスのリヴァージュ社から復刻版が出た Bourdeau 訳を参照されたい。「性愛の形而上学」においてショーペンハウアーは、二つの性を引きつける抗い難い力は生の意志であり、その意志は双方から生まれてくる子供の中に目的を実現する、と語る。子供は意志や性格を父親から、知性を母親から受け継ぐという哲学者の指摘はゾラの抜粋部分と合致する (Schopenhauer, *Docteurs du Monde*, traduit de l'allemand par Jean Bourdeau, Rivages poche, 1990, p. 66). 1880年に『箴言集』(«Pensées et Fragments»)というタイトルのもと出版された Bourdeau 訳のアンソロジーは出版当時フランスでたいへんな人気を博し、1881年には早くも新版がでた。ゾラだけではなくモーパッサンやユイスマンスなど他の自然主義作家達にも影響を与えた本書の分析については、田中琢三、「ゾラとショーペンハウアーの厭世哲学—『生きるよろこび』をめぐる—」、『仏語仏文学研究』、東京大学仏語仏文学研究会、第19号、1999年、p. 29-38.を参照。

- 11) *Ibid.*
- 12) Théodule Ribot, *La Philosophie de Schopenhauer*, Paris, Librairie Germer Baillière, 1874, p. 15.
- 13) 1896年3月24日の『フィガロ紙』に載せた「動物への愛」(「L'Amour des bêtes」)という記事で同年、動物愛護協会から表彰される(Henri Mitterand, *Zola : tome III(1893-1902)*, Paris, Fayard, 2002, p. 213). 同記事の邦訳は以下を参照されたい. 小倉孝誠・菅野賢治編訳『ゾラ・セレクション』第10巻、「動物への愛」、藤原書店、2002年、p.211-220.
- 14) «Le Roman expérimental», *Œuvres critiques (O. C.)X*, Paris, Cercle du Livre Précieux, 1968, p. 1220.
- 15) Claude Bernard, *Introduction à l'étude de la médecine expérimentale*, Paris, Garnier-Flammarion, 1966, p. 154.
- 16) ハンス・リューシュ『罪なきものの虐殺』荒木敏彦・戸田清訳、新泉社、1991年、p.264.
- 17) 遺伝に関しては、ゾラは以下の医学文献に依拠している. Prosper Lucas, *L'Hérédité naturelle*; Jules Déjerine, *L'Hérédité dans les maladies du système nerveux*; Auguste Weismann, *Essais sur l'hérédité et la sélection naturelle*.
- 18) «L'animal est meilleur que l'homme, le salut venant des plus petits.» Jules Michelet, *Cours au Collège de France I : 1838-1844*, Paris, Gallimard, 1995, p. 571.
- 19) 主にギリシア時代の哲学者をめぐる動物観を中心とした浩瀚な一冊. Richard Sorabji, *Animal and Human Morals : The Origine of the Western Debate*, New York, Cornell University Press, 1993. 動物には特に触れていないが、ギリシア、ルネサンス、及び現代にわたる体系的な自然観の考察はコリングウッドの『自然の観念』(R. G. コリングウッド、平林康之・小沼忠弘訳『自然の観念』、みすず書房、1974年)を参照.
- 20) 現代キリスト教側からの主張として、「つかさどる」(ヘブライ語の *kabash* は本来、鞭打って血を流してでも従わせるの意)を、英語で *stewardship* 「管理する」という解釈に置きかえて、キリスト教が本来持つべき自然への愛を訴える. 聖書解釈によって意見が分かれる例として、肉食の問題が挙げられる. 菜食主義の立場から聖書を非難する側は、次の神の言葉にみられるノアの洪水以前にあった動物と人間の調和を唱える. 「私は、地の表に生じて、種を実らせるすべての草を、種のある果実をつくるすべての木を、おまえたちに与える. それが、おまえたちの糧となろう. そして、野の獣、空の鳥、地にあるそれらすべての生き物の糧として、青草を与える。」(第1章第29 - 第30節)ここでは、第4章4節のアベルの生贄を除いて、動物と人間にそれぞれ菜食の原型がみられる. ところが

洪水後、神はノアに対して舟にのせてきた動物達を食用としてよいとする。「命あって動くものはみな、おまえたちの食べ物になる。前に青草を与えたように、これらのものをみなおまえたちに与える。」(第9章3節)

- 21) Ernest Renan, *La Vie de Jésus*, ch. XVIII «Institutions de Jésus», Paris, Editions Gallimard, 1974 (1<sup>re</sup> éd., 1863), p. 317-322.
- 22) *Ibid.*, ch. XIV «Rapports de Jésus avec les païens et les samaritains », p. 264.
- 23) *La Joie de Vivre*, *op. cit.*, p. 1012.
- 24) Jules Michelet, *Le Peuple*, Paris, Hachette, 1846 (2<sup>eme</sup> édition), p. 238-239.
- 25) Richard Sorabji, *op. cit.*, p. 12-13.
- 26) Platon, *La République*, Paris, Garnier-Frères, 1966, p. 125. 註によれば、この対話の *philosophie* という語をプラトンは広義で用いる。それは自然に知識に導かれ、そのなかに己の行動の指針を求める存在のすべてを指す。
- 27) Montaigne, *op. cit.*, p. 467-471.
- 28) Charles Renouvier, *Science de la morale*, 2 vol., Paris, Librairie Arthème Fayard, 2002, p. 61.
- 29) Philippe Muray, *Le XIXe siècle à travers les âges*, Paris, Denoël, 1991 (1<sup>re</sup> éd., 1984), p. 80.
- 30) ハンス・リューシュ、前掲書、p. 28。
- 31) 『19世紀ピエール・ラルース大辞典』 *Grand dictionnaire universel du XIXe siècle par Pierre Larousse*.
- 32) 『ラルース大辞典』はマジャンディを擁護しており、「普遍性」を目指す大辞典が明らかに客観性を欠いている。本辞典の成立、及びその時代におけるイデオロギー的役割については、以下を参照。工藤庸子『ヨーロッパ文明批判序説』、第2部第3章「共和国の辞典 — ピエール・ラルースをめぐる」、東京大学出版会、2003年、p. 230-242。工藤氏によれば、明確なイデオロギーを持つ項目は、執筆協力者に頼らずラルース自身が執筆するか、目をとすかしていたという(同上、p. 232)。
- 33) ハンス・リューシュ、前掲書、p. 257。他に、金森修「人体実験」(市野川容孝編『生命倫理とはなにか』、平凡社、2002年、p. 30)を参照。
- 34) ベルナルの助手であったジョージ・ホガン博士の証言は1875年2月1日のモーニング・ポスト紙に掲載された。「4ヶ月にわたる経験の後、私は動物実験のうち一つとして正当なものであり必要なものはなかったという意見を持っている。」(ハンス・リューシュ、前掲書、p. 191)  
同年の王立調査委員会の『報告』では、もとベルナルの同僚であったアーサー・デ・ノーエイ・ウォーカー博士の証言がある。「私はこのおぞましい実験を批判することすらお断りしたい。実験者に対する軽蔑と不快感が



- あまりにも大きいからである。あの男から生理学の講義者と教師としての地位を剥奪してやりたいほどであった。」（議会記録 4888 号）（同上、p. 192）
- 35) Frederic Lawrence Holmes, *Claude Bernard and Animal Chemistry : The Emergence of a Scientist*, Cambridge, Harvard University Press, 1974, p. 386.
- 36) ショーペンハウアー、前掲書、p. 197.
- 37) *La Terre*, tome IV, p. 430.
- 38) 『生きる喜び』の準備ノートでゾラがラザールを形容した表現（«un pessimiste, un malade de nos sciences commençantes», *La Joie de Vivre*, N.a.f. 10311, folios 172-173）.
- 39) E. Caro, *Le Pessimisme au XIXe siècle : Léopardi-Schopenhauer-Hartmann*, Paris, Librairie Hachette, 1878, p. 276.
- 40) カズノーヴとパスカルの医学観についてはそれぞれ以下のページを参照。  
*La Joie de Vivre*, op. cit., p.993. *Le Docteur Pascal*, op. cit., p. 1211-1212.
- 41) Emile Zola, *Lourdes*, édition établie par Henri Mitterand, Paris, Stock, 1998, p. 171.
- 42) *Ibid.*, p. 170.
- 43) «Le Roman expérimental», *O.C.X*, op. cit., p. 1193.
- 44) Claude Bernard, p. 286.
- 45) *Ibid.*, p. 278.
- 46) *Le Docteur Pascal*, op. cit., p. 1084.
- 47) ゾラはこのタイトル及び内容を以下の記事から書き写している。Eugène-Melchior, De Vogüé, «Après M. Renan», *La Revue des Deux Mondes*, le 15 novembre, 1892, p. 449 .
- 48) *Le Docteur Pascal*, N.a.f. 10290, f°228.
- 49) «l'idée de la sérénité pour la science» *Ibid.*, f°232.
- 50) 1893 年、ゾラが学生達を前に行った講演。科学信仰崩壊による価値観の動揺と、心の救いを机上の空論に求める青年達の渴望を前に「働くことだけが勇気と信仰を与える」と主張している。「Discours aux Etudiants», t. V, op. cit., p. 1612 .
- 51) Ernest Renan, *L'Avenir de la Science*, Paris, Garnier-frères, 1995 (1<sup>re</sup> éd., 1890), p. 90.
- 52) N.a.f. 10290, f°57.
- 53) *Le Docteur Pascal*, op. cit., p. 1019-1020.

（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）